大学出版

2001.9 No.50 秋

大学と社会を結ぶ知のネットワーク

能楽の四季――秋 ■ 中西 通 ――表2

50号記念特集＊大学出版、世界では

日本における大学出版部の今日的状況
その理念と現実から ■ 渡辺 勲 ――2

アメリカ大学出版部の現況
アイオワ州立大学出版会売却の衝撃 ■ 山本 俊明 ――6

威信のための装置 ■ 箕輪 成男 ――10

古くて新しい大学出版
オックスフォード大学出版局（OUP） ■ 川脇 達郎 ――14

海外の大学出版部関連記事 ■ 『大学出版』既刊より ――17

科学する目 3 足の数 ■ 青木 淳一 ――18

歩く・見る・聞く 知のネットワーク 23 物流博物館 ――20

大学出版部ニュース ――22

製作の現場から 25 ――32

デジタル出版最前線 3 ――表3

大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

能楽の四季

秋

中西 通（能楽資料館 館長）

悟り絵の面白さ

穫った稲穂に張り渡された雀除けの鳴子。

これは昔ながらの日本の秋の原風景の一つである。デザインとしても、絵画・漆絵・彫刻などに採り入れられているが、小鼓・大鼓の胴に描かれた蒔絵にもよく見かけられる。これは季節的な題材とも考えられるが、「鳴子」すなわち鳴るという音を主題とした図柄が、楽器としての小鼓に好んで用いられたのである。

私は能面を蒐集する以前、小鼓・大鼓・能管・太鼓等の古楽器、すなわち能の「囃子方」の道具に非常に興味をもった。それは徐々にわかってきたことだが、小鼓や大鼓は、ほぼ桃山時代に至って現在の形となり、そのときに生まれたものがただ単に古いというだけではなく、楽器としての機能が非常に優れているということである。作者の銘はまったく記されておらず、作者個有の彫痕で作者の違いを見分けなければならない。

素材は小鼓・大鼓ともに桜材、小鼓の皮は馬の腹部を用い、大鼓は馬の首筋から背にかけてのものを用いるという。

なかでも最も興味を覚えたのは、冒頭にも書いたように、胴の部分に施された蒔絵の図柄であった。形は革と接する碗の部分と中央の筒の部分に分かれるが、単純に見えるものの、全体としては曲面、凹凸が多く複雑である。それに図柄を割り付け、上下はもとより、三六〇度からの目に堪える構成は容易なものではない。私は大いに興味を持ち、集めてみたいと思った。結果、その図柄から発見したことがいくつもあった。

ほとんどが「音」に関するもので、「稲穂に鳴子」もよく鳴る胴であることを意味し、「鉞の上単」の図は良き音と読み、「錠を散らした蒔絵」は上手と読む。さらに傑作は、「錠に柿の蔕と梨」を上手下手なしと判じる。その他、果物の生り（鳴り）もの尽くし、蒲公英は根（音）が切れない、蕉は根（音）が太い、また法螺貝は遠音に響くなどと枚挙にいとまがない。まさに判じ絵・悟り絵の世界であり、作者や注文主の知識の深さと洒落っ気が感じられる。シテ方の舞台を支えた囃子方は、緊張した空間の中にこのような遊び心を見出したのであろうか。

この蒔絵のデザインとは別に、個々の作者が遺した彫痕の特徴は、作者や時代の判定はもちろん、本来の楽器としての機能に大きなかかわり合いをもつものである。この研究には大いに興味をもっているが、関心をもたれる方があれば、これまでのわずかな知識と手持ちの資料を提供したいと思っている。

特集

大学出版、世界では

いま世界の大学出版部では、何が起こっているのか？　通算五〇号という大きな節目を迎えたのを機に、この大きなテーマについて概観してみることにしました。

世界を眺めてみると、大学出版部の存在意義を改めて問い直すための材料が、次々に浮かび上がってきます。最大勢力アメリカの「儲かる学術書」への方針転換の意味。発祥の地イギリス・オックスフォード大学の歴史をひもとくことからみえる「本質」。日本の大学出版部協会の新旧幹事長が訴える大学出版部の「原点」。

海外の例に違わず、日本の大学出版部も危機的状況にあるといえるでしょう。だからこそ、一つひとつこれらの問いとの格闘を積み重ねることによって、明るい未来を切り拓いていく必要があるのではないでしょうか。

大学・大学人、そして出版人が「大学出版部とは何か」を再確認する手がかりとなるとともに、大学出版部の活動が社会に対して、より広く理解を得られるきっかけとなることを願っております。

日本における大学出版部の今日的状況　その理念と現実から

渡辺　勲（大学出版部協会幹事長・東京大学出版会）

はじめに

私たちの組織、大学出版部協会は一九六三年六月、八大学出版部と二学術団体によって結成された。三八年後の今日、協会は二六大学出版部を擁する出版業界の一有力団体へと自らの組織を拡大し、協会機関誌として一九八六年四月に創刊された本誌は、記念すべき第五〇号を迎え得た。

ここで、大学出版部協会の創立以来の活動の総体を、あえて一言で総括するならば、自らの出版部の日々の多忙な業務を担いながら同時に、協会としての多彩な諸活動に献身してきた多くの「大学出版人」によって創造され、維持されてきた「成長と発展」こそが主要な側面であった、と評価されるべきである。私はこのことを正当に位置付け、かつ踏まえながら、協会組織の単位である個別出版部の目線で、さらには協会未加盟ながら、すでに大学出版部としての活動を開始している個々の出版部のレベルで、大学出版部の今日的状況について考えてみたいと思う。

「気がかり」と「違和感」

一九九三年、協会が創立三〇年を迎えたとき（加盟出版部数は二〇となっていた）、私たちは年誌『大学出版部協会30年の歩み』を製作、頒布した。その中に収められた「大学出版部小史」（平川俊彦氏）は「数世紀の歴史を有する／アメリカにおける発展／近代日本の大学出版部／戦後の発展と大学出版部協会／二十一世紀へ向けて」の五節からなり、今読み返してみても見事と言うほかはない作品であるが、私は「小史」中の次のようなまとめの一文が気になっている。――「大学出版部は社会が大学に穿った通風孔であった。大学からすれば、社会に伸ばした手であった。大学と社会を結ぶ機関として、大学当局の理解と援助、母体大学の学問的生産性、そして有能なスタッフによって、大学出版部は発展してきた。それは今後も変わるまい。」……理念的にはともかく、現実的にも「今後も変わるまい」とまとめ切れるのだろうか、と。

一九九八年、協会は創立三五年を迎え（加盟出版部数は二四）新しく『35年の歩み』を編み、詳細な協会史「年表」を作成、収録した。私はこの小文執筆の機会にあらためて、われらが事積の「証」である「年表」を子細に眺め廻し、そしてやや意外ではあったが、この年表に名状しがたい違和感を持ってしまったのである。……これらの記事は本当に今日的状況の歴史的前提をなしているのか、協会「発展史」は個別出版部の発展史でもあり得たのか、と。

「五世紀の教訓」

G・R・ホウズは『大学出版部』（箕輪成男訳、一九六九年。原書刊行は一九六七年）の「第二章　大学出版部の歴史」の中で「オックス・ブリッジの遺産から引き出される結論」として次のように述べた（以下の引用は要約）。

「(1)出版部存立のためには、大学幹部の熱烈な支持が必要である。(2)その企図する学術出版計画に対して、十分に余裕のある財政的援助が必要である。(3)出版部には、他の職務によって妨げられない専属の有能な指揮者が必要である」から「いかなる（大学の）理事会でも、たとえそれがいかに活発でよく選ばれたメンバーであろうとも、みずからの人生の幸福を出版部の成功に賭けた知的で注意深い管理者の代わりを果たすことはできない。」

五世紀におよぶ大学出版部の歴史（とは言ってもそれは事実上「オックス・ブリッジ」のそれであるが）と、三十数年前のアメリカ大学出版部の発展段階とを踏まえて定式化されたこの三提言は、以後「大学の意思、財政（補助金）、現場担手」問題として、大学出版部を語る際に必ずと言ってよいほど引き合いに出されてきた（先に紹介した「小史」まとめもその一例である）。つまりこの三提言は、単に当時のアメリカ的事情を説明する文章ではなくなり、大学出版部たるものの、あるべき「原点」として、指針的役割を担い、そして実際に担い続けてきたのである。

しかし歴史とは皮肉なものである。「大学出版部の優等生」と目されてきたアメリカで、今この「原点」は崩壊しつつある。「崩壊」と表したのには多少の意味がある。アメリカでは一〇〇以上の大学出版部が、その仕組・水準・規模の違いはおくとして、この「原点」を達成し、絶えず意識して活動し、多くの出版部はまさにその通りの活動を行ってきた、それが崩壊しつつあるのだ（文脈は違うが、例えばアンドリュー・クーパー「学術出版の危機を乗り越えるには」『別冊本とコンピュータ』4、参照）。

私はここで今日のアメリカ的事情を云々しようとしているのではない。問題にしたいのは、日本における大学出版部は（協会に加盟していると否とにかかわりなく）、かつてあるいは現在、この原点をどれほど意識して活動してきたか、あるいは活動を開始しようとしているのか、つまり日本では「原点の崩壊」以前的状況を通過中であるというのが実態であり現実ではないのか、ということである。と

するならば、今こそあらためて、あるいは新しく、この三提言を強く意識した原点的「大学出版部活動」を開始すべきではないのか、これである。

大学出版部設立の気運

ここ数年のことだが、協会にはいくつもの出版部設立の相談や設立報告、協会加盟申請などが寄せられている。今なぜ大学出版部なのか、と戸惑うほどである。大変結構なことだと思う半面、これで良いのかと首を捻ることも少なくない。つまりそこに表出された、良くも悪くも大学あるいは大学人の「大学出版部」認識のことである。

一九九一年「大学設置基準の自由化」と一八歳人口の激減予測、その現実化とが、全国のあらゆるタイプの大学に自らの「生き残り」をかけた「改革」を強いた。大学の自己点検と外部評価が、その基礎に置かれた。そして全ての大学で、研究の質と量、研究と教育、学問の経済性などをめぐる議論が熱っぽくたたかわされた、に違いない。そして、そのような議論の中からいくつかの出版部も誕生した。しかし大学の側は、大学出版部とは何か・その歴史は、などの基礎的学習を軽視しただけではなく、大学が出版部を設立するとはどのようなことか、どのようなオブリゲーションを覚悟しなければならないか、などの最も肝心な検討を棚上げにしたか、あるいは事実上無視した。だから出版部設立に意欲的な大学人の最大公約数的認識が「近年の厳しい出版状況下では学内の研究成果を出版物として発表することが難しくなったので、自前の出版部を作ることにした」に止まるのである。ここには、大学の理念も大学当局の熱烈な支持も感じられない。ましてや出版人による出版現場（実質的な出版部）作りの見通しなど生まれるはずもないのである。

さて翻って、私たち自身、協会加盟出版部の状況も観察しなければならない。さすがに、規模や質を問わないならば、ほとんどの出版部が出版人を抱えた現場を持っている。しかし、事態は個性的ながら、いずれの現場も誠に厳しい。かの「原点」は忘られてはいないものの出発点どころではなく、目標としてすら機能していない、そんな現実が垣間見えるのである。つまり今日、すべての大学出版部は、たとえ長い歴史をもつ出版部であろうと大規模出版部であろうと、生まれたばかりの出版部であろうと当面大学人だけの出版部であろうと、極めて厳しい大変な時代に逢着しており困難な課題を抱えている、ということである。

「原点」を正面に据える

先ほどからクドイほどに語っている「大学出版部の原点」は決して過去の遺物ではない。それどころか、今こそ見直されるべき指針である。日本の大学出版部協会ではマトモには一度も正面に据えたことのないこの「原点」を、新しく出版部を作ろうとしている大学人とともに、個々の出版

部においても大学出版部協会としても高く掲げなければならない情勢にある、と、私は確信している。つまり、現状の単純な延長線上の、経済的な意味での出版業の論理だけでは、大学出版部にとっての最も重要な「学術書・教科書・啓蒙書」出版の仕事は、もはや継続することはできない。と同時に、「原点」を踏まえたまっとうな大学出版部を目指し、そして育て、そして維持していくことのできないような大学は、二十一世紀を生きていけなくなる。大学出版部は、かくして、ただの「大学機構の部分」でもない普通の「出版社」でもない、「大学出版部」としての実態と存在の意味を、あらためて、与えられつつあるし、与えられねばならないのである。

先に掲げた「小史」まとめの「それは今後も変わるまい」を正確に理解するには右のような状況認識が必要であろうし、「年表」の違和感から解き放たれるためには、将来に向かってどのような目標をかかげるかを発見しなければならなかったのである。

大学出版部協会の拡大・強化

協会既加盟の出版部、特に事実上の開店休業状態に追い込まれている出版部とその母体大学のトップに訴えたい。せっかく存在している出版部を、大学の発展のために再活性化する方途を、財政的裏づけを含めて、今すぐに検討していただきたい。大学は「現場」を信頼し、現場は大学の期待に応えるように努力することを確認し合い、「我々が頑張れば大学の社会的ステータスが高まる」ことを確信して、新たな活動方針の策定にかかっていただきたい。

協会未加盟の出版部には、加盟の方向で検討を始めていただきたい。無条件に加盟できるわけではないし、「原点」は遠くにしか見えないかも知れないが、協会活動を共にする中で、「大学幹部の熱烈な支持」をとりつけ、一歩一歩目標に近づいていこうではないか。大学当局は、間違いなく何らかの意味で必要だから、期待を込めて、出版部の創設に踏み切ったはずだ。設立直後の今だからこそ、少なくとも理念的には、「原点」のすぐ近くに出版部はある。

大学出版部協会に加盟したからには、たとえ規模が小さくても、たとえ大学人中心の組織であろうとも、あるいは「現場」が大学の外に依託されていようとも、「原点」の理念的な共有とともに、具体的な協会活動に参加していただきたい。協会組織を担う私たちは、協会活動への積極的参加が個別出版部の力をも高めていく、そのような両者の関係を作り上げていかなければならない。協会活動の成果を当てにしただけの加盟は、協会にとっても出版部にとっても、為にはならないのである。

大学は知的生産の拠点である。大学出版部はその知的生産物の公刊の担手である。両者を取り巻く環境がいかに変わろうとも、両者のそれぞれの本性に本質的変化が生じない限り、大学と大学出版部は、共に、存在し続ける。

アメリカ大学出版部の現況

アイオワ州立大学出版会売却の衝撃

山本 俊明（大学出版部協会副幹事長・聖学院大学出版会）

「米の州立大学出版会、民間に売られ波紋」

「朝日新聞」夕刊に、このような見出しで、アイオワ州立大学出版会（ＩＳＵＰ）が、イギリスに本拠を置く大規模商業出版社ブラックウェル・サイエンスに売却されたことが報じられたのは、昨年十月二十日のことである。売却の理由は、「巨大出版会と小規模出版会への二極化が進む中でＩＳＵＰなど中規模の大学出版会は変革の流れについていけないからだ」と出版会側の説明を紹介している。続いて「黒字経営が続いていることなどから、多くの関係者はこの説明に首をかしげている」とコメントされている。

この出来事は、アメリカ大学出版部協会だけでなく、高等教育の世界にも衝撃を与えたようで、“The Chronicle of Higher Education”や“Lingua Franca”[i]などでも取り上げられた。新聞記事だけでは理解しにくいが、この出来事の背景には、これまでアメリカの大学出版部の特色であった「大学は採算の取りにくい学術書を出版する出版部に補助金を出し財政的に支援する」、「大学出版部は商業出版社と違って、Not-for-Profitに運営される」という基本的性格が変化したことがあるように思う。

見失われた大学出版部の設立理念

ＩＳＵＰは、一九二四年に設立され、航空工学、獣医学など特色ある分野で出版活動をしてきた。年間出版点数は四〇から六〇点、流通在庫として六〇〇点以上をもっており、職員が二四人のアメリカでは中堅の大学出版会である。一九九九年度に四〇〇万ドルの売上で一〇万ドルの収益を上げていることをみても、なぜ売却しなければならなかったのか、また、大学は出版部の役割をどのように考え、出版部をどのように支援してきたのか、という疑問も湧く。

ＩＳＵＰ理事長のアル・オースティンは、大学と出版会の関係について、少なくとも四〇年間、大学からの資金的援助を受けることなく出版活動をしてきたという。経営状

態については、収益を出しているが、これからのデジタル時代における出版会の経営を考えると十分ではなく、八〇〇万ドルの売上か、二五〇万ドルの経費削減が必要になる。さまざまな可能性を検討したが、選択肢としては、新しい時代に対応できるだけの収益を上げるか、出版活動を中止するかのいずれかであった。大学が、これ以上出版活動に資金を投入するとは考えられず、商業出版社に売却することになった、というのである。

アメリカ大学出版部協会（ＡＡＵＰ）常任理事のピーター・ギヴラーは、ＩＳＵＰが、これからの出版会の経営に八〇〇万ドル必要とどのように計算したのか、出版会経営について十分な知識がなかったのではないか、と疑問を呈している。しかし、筆者にそれ以上に問題だと思えるのは、七六年の歴史の中で、「大学が出版活動を通して何をするか」という出版部設立の理念、大学と出版部のあるべき関係が見失われてしまったのではないか、ということである。

不明確になった大学出版部と商業出版社の違い

ＩＳＵＰは、長年、大学からの補助金を当てにすることなく、「商業出版社として活動してきた」（アル・オースティン）というが、ピーター・ギヴラーによれば、多くのアメリカの大学出版部は、一九七〇年代はじめに大学から補助金を削減され、また、大学出版部の出版物の主要購入先であった図書館の予算が縮小され、自立の道を選ばざるをえなかったという[ii]。そこで、大学出版部は、経営を成り立たせるために、一般読者に向けた「売れる本」「儲かる学術書」の出版へと出版方針を転換したのである[iii]。しかしこのことは別の観点から見ると、大学出版部本来の使命を放棄することではなかったか。

ラトガース大学英語学教授のウィリアム・ダウリングは、大学出版部が著名な著者の売れる本だけを出版するようになり、一方で採算の合わない学術書、特に若手の、無名の研究者の本が出せなくなっていると批判している[iv]。

「売れる本」への出版方針の転換には、大学における終身雇用権（tenure）を獲得しようとする若手研究者の業績づくりのために、読者のほとんどいないような博士論文を出版してきたという大学出版部側の反省もあるようである。しかし一般読者を対象にした「儲かる学術書」へとシフトすることにより、結果的に「商業出版社が採算の点で出版を見合わせるような、しかし学術的価値の高い本を出版する」というこれまでの大学出版の基本理念が曖昧になってしまったのである。アメリカの大学出版部の特色であった「大学出版部と商業出版社の違い」が不明確になったのである。

危機状況にある大学出版部

それでは、アメリカ大学出版部協会に加盟する一二一大学出版部全体の状況はどうか。フォーダム大学経営学大学

院教授でＡＡＵＰのコンサルタントのアルバート・Ｎ・グレコによれば、九〇年代、アメリカの大学出版部の多くは赤字経営であった（黒字は十数社のみ）。にもかかわらず、大学出版部は、可能な限り出版経費を削減したり、寄付金を募ったり経営努力を重ねて出版活動を継続させてきた。だから黒字のＩＳＵＰが売却されるというまったく予期されなかった出来事こそ、大学出版部が置かれている危機状況の象徴であった、という[v]。

グレコは九〇年代に大学出版部の経営環境が不安定なものになった要因を四つ挙げている。一、図書館、研究機関における書籍購入予算の引き締め、二、商業出版社との著者、原稿をめぐる厳しい競争、三、コンピュータ・テクノロジーの発展（とくに原稿入力から在庫管理に至るまでコンピュータによる処理に変化したこと）、四、オンデマンド出版やオンライン書店などオンライン化した出版・配送システムの過剰な導入、である。三と四がどのような因果関係で経営環境に影響するか、グレコは具体的に論じていないが、「アイオワ州立大学の関係者は、限られた資金で、費用のかかるネットワーク環境を整備する必要を考えたときに出版会を継続できるか、あきらかに疑問をもった」と述べていることをみると、新しいテクノロジーによる出版とそれに対応する経費が大学出版部の経営を脅かすと考えているようである[vi]。

アメリカ学術会議が、大学出版部協会（当初、七出版部が参加）などと共同で歴史学分野のeBookプロジェクトを立ち上げたが[vii]、そこに参加している出版部は、たしかにハーバード、ジョンズ・ホプキンズなど、すでにオンライン出版を実験的に始めている大手の大学出版部である。新しい大学出版の状況に対応する準備ができている「大手出版部」と、新しいテクノロジーとは関わりなく伝統的な出版を続けていく「小規模出版部」の二極化が進んでいくことになるのかもしれない。

グレコは、「大学出版部がターゲットにしている一般読者のマーケットは二〇〇四年まで拡大していく」と楽観的見通しを提示するが、ますます商業出版社との競争が激しくなり、大学からの補助金が減じられていく中で、大学出版部はどのような活動をしていくのか、新しいテクノロジーを利用した学術書出版はどのように可能なのか、など、筆者には先の見えない状況に映る。

「大学出版部の意義」（The Value of University Presses）

このような状況の中、ＡＡＵＰは、六月に開かれた二〇〇一年度年次総会で「大学出版部の意義」[viii]を発表した。この「意義」を改めて発表したのは、アイオワ州立大学だけでなく、出版基金を切り崩そうとしたアーカンソー大学の出来事などに見られるように、大学に「大学出版部とは何か」についての間違った理解があるからだ、という。

内容は、「大学出版部と社会」（大学出版部の社会におけ

る意義)、「大学出版部と学問」(学問研究に対する大学出版部の役割)、「大学コミュニティにおける大学出版部」(大学に対して大学出版部は何ができるか)という三つの項目に分けられ、二十四の文章によって構成されている。

ここには、「商業出版社が関心を持たないが貴重な萌芽的研究」や「若手の研究者の出版」を支援することなどが挙げられている。アメリカの大学出版部が、これまで当然としてきた「大学出版部の意義」をもう一度確認したいということなのである。

このように大学出版部の基本理念を再確認しなければならないところに、いまのアメリカの大学出版部が置かれている困難な状況がある。しかし、それはアメリカの大学出版部だけの問題ではない。大学出版部の規模も歴史も異なるが、大学改革、出版不況、メディア革命の中にある日本の大学出版部も改めて確認すべき事柄ではないか、と思う。

i) Scott Heller, "Iowa State Hands Its Press to a Commercial Publisher," *The Chronicle of Higher Education*, July 28, 2000, A22. Andrew R. Albanese, "My Own Private Iowa," *Lingua Franca*, Volume 10, No.7- October, 2000. "Iowa State University Press Sold to Blackwell Science," *The Exchange*, Fall 2000, p.2, AAUP.

ii) 筆者がAAUP常任理事のピーター・ギヴラーにたずねたところによると、連邦政府が教育・研究に予算を十分に注いだのは、冷戦下の一九五八―六八年までの比較的短い期間だけであり、その後、一九六九―七〇年から予算は削減されてきた。明らかな影響は図書購入予算の減少に表われ、冷戦下では、図書館は大学出版部の書籍を一点あたり一二〇〇部から一五〇〇部購入していたが、今や二〇〇部程度になっている。またこの同じ時期に大学予算も削減され、その結果、大学の大学出版部に対する補助金も減じられたという。

iii) 渡辺勲「岐路に立つ大学出版部」『大学出版』四〇号、一九九九年一月、一〇―一四頁。Peter Givler, "Scholarly Books, the Coin of the Realm of Knowledge," *The Chronicle of Higher Education*, November 12, 1999, A76 参照。

iv) William C. Dowling, "Saving Scholarly Publishing in the Age of Oprah: The Glastonbury Project," *Journal of Scholarly Publishing*, Volume 28, Number 3, April 1997, p.115-134.

v) Albert N. Greco, "The General Reader Market for University Press Books in the United States, 1990-1999, With Projections for the Years 2000 through 2004," *Journal of Scholarly Publishing*, Volume 32, Number 2, January 2001, p.61-86.

vi) Peter Givler, *op.cit.* A76 は、十年前に、インターネットが解決するといわれた学術書出版の費用削減は、新たに導入した技術費用、人件費などで逆に費用が増大したと報告している。

vii) John F. Barker, "Creating a Scholarly Web of Information," *Publishers Weekly*, June 21, 2001, p.27-32, Cahners. またこのプロジェクトの概要は http://www. historyEBook.org とPDFファイルで載っている。

viii) "The Value of University Presses: An Initiative from AAUP," *The Exchange*, Winter 2001, p.1-3. AAUPのWebsite : http://aaupnet.org/ 参照。

(この報告をまとめるにあたり、AAUP常任理事、Peter Givler氏、この六月まで理事であり「大学出版部の意義」の起草委員のひとりであった、カンザス大学出版部 Susan Schott 氏、広報担当の Brenna McLaughlin 氏にご協力をいただいた。)

威信のための装置

箕輪 成男（神奈川大学名誉教授）

正確さと真理

オックスフォード大学出版部はしばしば五〇〇年の歴史をもつといわれる。しかしそれは中世末期の大学町オックスフォードに設けられた最初の民間の印刷所が、大学の認可の下に書籍の生産をはじめた一四八七年を起点とした場合の話である。大学自体が自ら運用する印刷所を設置し、印刷、出版活動をはじめたのは、はるか二〇〇年後の一六九〇年である。ハリー・カーターは彼のオックスフォード大学出版部史第一巻で、一六九〇年以前を前史、一六九〇年以後を歴史と区別している。

オックスフォードにおける印刷・出版五〇〇年の歴史からさらに遡ると、一二世紀の大学設立以来三〇〇年間は写本時代である。印刷以前の時代においては、著述は写本でなされた。写本は最低発行部数などを心配する必要がなく、ただ一人の読者のためにでも注文生産できる好都合な側面をもっていたが、その泣き所は筆写の過程で間違いが起るのを避けにくいことであった。いったん公表されたあと、次々に転写される過程に監視の目を行き届かせることは不可能であった。早くもローマ時代に出版者として名声を博したアッティクスのアッティカ版は、筆写の正確さによってその声価を高めた。それでも著作権のない古代では、アッティカ版を無断筆写することができたのだから、基本的に誤写の発生は避けられなかった。

こうして後世に伝えられた古典には、多くの異同がふくまれることになり、その正否を校証することが、ユマニストたちの重要な仕事になった。写本時代に属する中世の大学社会では、この問題に対する対策のひとつとして、大学による写本の管理が行われた。大学出版部の遠い先祖ともいうべきステーショナー（大学認定の写本業者）に対し、大学が範本を提供すると共に、作製された写本の正確さを随時チェックしたのである。印刷時代になると、大学出版部のより近い先祖、大学印刷人に指定された印刷業者は組

版の正確さを厳守するよう大学の指示・監督を受けた。印刷によって、写本時代よりはるかに事態は改善されたものの、相変らず誤植の発生は避けられなかったのだ。

このように著述の正確さが求められたのは、学問が誤りのない知識すわなち真理を追究するものであるからだ。真理を追究する書物の内容がいい加減では学問にならない。学者のレーゾンデートルは名利を超越して真理の追究に献身し、その結果物事の真の姿と、あるべき姿を発見し、それを人々に提示することにある。

ただし、ここで言う真理は、かつてのようにかなり主観を交えた「絶対的真理」を意味しない。科学の時代になると、それは相対的真理に転換する。「真理」はその時点で考え得る最良の説明にすぎない。環境が変わってうまく説明できなくなると、新しいパラダイムが考えつかれ、再びよりよい説明が与えられる。科学時代の真理は、こうしていつかは乗り越えられることを予定した、つかの間の相対的な真理なのである。

威信をかけた「発表」(=publishing)

科学以前の絶対的な真理であれ、科学以後の相対的真理であれ、それを追求する学者の真摯な営みは、そのすぐれた才能と献身によって、そしてまた彼らの発見した真実の意味の重大さによって、人々の尊敬と信頼を集めることになる。学者における権威の発生である。学者とその集団である大学が身につける威信といってもよい。辞典には権威とは「人を納得させるだけの信頼性があること」とあり、威信とは「人・国家などがもっている威光と信望」であるとされている。大学における教育もまた大学と教員の権威を前提として成立している。大学は単なる情報伝達を行っているのではない。教員の保持する権威、威信の力が、学生に対する教え込み（インドクトリネーション）を可能にしているのだ。

学問の世界を統合する原理は、このように真理の発見のために献身し、真実を求めて生きる学問共同体の成員に対する相互信頼である。大学教員への加入の審査は大変厳しいが、一旦加入したあとは成員に最大の自由が認められるのはこの原理から来ている。だから学者にとって、その真摯な研究・教育活動により自己の権威を高めることは、大学共同体の成員としての基本的義務である。大学の権威はそれら個々の成員のもつ権威の総和にほかならないからだ。

さて学者がその権威の確立を目ざして自らの発見を学問共同体の仲間に問いかける手段は著述を通してである。だから著述とその複製の行為は、学問の世界における権威確立の作業そのものである。その意味で大学出版部の社会的機能を、学術情報の伝達と捉えるのは必ずしも適切ではない。たしかに「情報の伝達」は、新知見の生産からその評価、選衡、整理、複製、送達、利用まで、学問の還流のすべての過程をふくむ概念と考えることも可能だが、一方で

「伝達」は、時間と空間の制約を超えた物理的送達の意味に狭くとらえられる恐れが大きいからである。学術出版は研究成果の「伝達」(transfer) というより研究成果の「発表」(publish) という方がその間のニュアンスをよりよく反映するように思われる。

というわけで研究者が論文や単行本を通して研究成果の発表を行うのは、決して研究者仲間に自分の新しい発見を伝えたいためではない。自分の達成した成果が、レフェリーに評価され、権威ある雑誌や専門書に権威ある様式で収録、複製され、彼の研究者としての威信が高まることを期待しているのである。それは自己の名誉心の充足のためであって、格別利他的に情報を学者仲間に提供したいわけではない。伝達は発表という学界のメカニズムの結果として起きるにすぎない。自己の名声をかけた作業だから、研究者は時間や金やあらゆるものを犠牲にしてでも研究にのめりこむのである。こうして個々の研究者が威信の獲得のために行う研究発表は、学問共同体を組立てる基本的メカニズムとして定着し、多年機能してきた。それなくしては学問の世界は崩壊するにちがいない。

権威を創出するもの

大学出版部は学問共同体の止ることのない研究活動の還流の中で、研究者が研究発表によって威信という成功の報酬を確保するための装置なのであって、単なる出版機関としてあるのではないのだ。大学出版部は学者と大学の権威増幅機関として発達してきた。学者と大学は大学出版部がなければその著述を公刊できないわけではない。たとえばヨーロッパに、オックスフォードやケンブリッジの大学出版部が生まれたのは、むしろ例外的なケースであったとも考えられる。これらの出版部がイギリスに生まれたのは、イギリスが自国産業の保護と文化的自立政策をとる中で、高度な学術書を出版する技術力・資金力を持たなかった未熟なイギリス出版産業に代わるものとして興したのであり、多分に国策的産物であったのだ。王室が両出版部に、聖書出版の特権を与えたのもそのためである。

一方、アメリカの大学出版部は広大な国土がその背景にある。地方の大学では、学術発表に必要な印刷サービスを地方で得られなかったから、それを補完するために大学出版部が着想されたのである。

というわけで、むしろ特殊な事情の下に始まったのが大学出版部であり、書籍を通しての学術発表は、決して大学出版部が独占してきたわけではない。しかしその使命をより直接的に、深刻に受け止めているのが大学出版部であることはたしかだ。各出版部は、母体大学の威信をかけて大学の名前を称えているのである。

いま世界には三〇〇ないし四〇〇の大学出版部があると思われる。アメリカには大学出版部協会(AAUP)の正・準会員が約一〇〇校、アジアでは日中韓を中心に一〇〇校

以上、ラテンアメリカ三〇校、アフリカ二五校、ヨーロッパ、ロシア、インド、オセアニア等で少なくとも五〇校ないし一〇〇校である。

印刷術の伝播、出版業の確立の早かったヨーロッパ大陸では、学術出版機能は民間出版社が伝統的に担当することが多かったから、大学出版部はむしろ少ない。これに対し発展途上国では、各国を代表する主要大学に、大学出版部の設けられたものが多い。国の学術振興政策の重要な一環として位置づけられているのである。

そして再びの「原点」

大学出版部の財政的存立基盤から、われわれに二つのモデルを考えることができる。大学出版部の財政を、大学、政府、諸財団等、外部からの補助金によってまかなうアメリカモデルと、学術書以外の、例えば教科書等、採算性のよい書籍を併せ出版することによって、学術書の赤字を補填するイギリスモデルである。ただし、これらのモデルはあくまでも理念形であって、現実の出版部の多くは両モデルの混合型であり、しかも情勢に応じて、二つのモデルに対するシフトを変えつつ運営しているのである。

大学出版部が大学の威信をかけて活動する上で三つの原則がすでに確立している。第一は刊行書の評価、選別における客観性、公平性、優秀性の確保であり、第二は複製上の高度な質の実現である。そして第三は最善の事業効果の達成である。第一の企画編集は学問共同体における権威樹立過程への直接参加にほかならない。その努力の結果が長いスパンでしか確認できない微妙なものであり、かつ判断の要素が多分に加わるだけに、この原則の維持はいっそう困難である。第二の原稿編集は目に見える形での発表の質の提示にほかならず、学者と大学の権威により直接的に影響を与えるだろう。第三の事業効率もまた大学出版部の存立にとって最も重要な問題である。学術出版の成功には多年にわたる持続的努力が必要だが、そうした持続を可能にする資金の計画を長期的に確保・確立することは決して容易でないからだ。

こうして大学出版部の基本的な機能が、決して情報伝達そのものにあるのでなく、研究者と大学の威信の創出、強化にあるのであるとするならば、人々に期待を寄せられているIT革命も、残念ながらあまり学術出版の助けにはならないのではないかと思われる。インターネットで、たしかに「情報」の伝達は便利になる。しかしそこに評価も選衡もなく、編集・整理もないとしたら、それは、どこのものともわからない、ゴミのような情報となる。そこでは、人々はみずから評価し選別しなければならない。そうしたメディアには、権威や威信は生れにくいのではなかろうか。研究者の達成感を満足させ、成果を顕彰するに十分なメカニズム抜きで、学問の世界は存立し得るのだろうか。

古くて新しい大学出版 オックスフォード大学出版局（OUP）

川脇 達郎（OUP東京 一九五四～一九九四在籍）

大学設立の正確な年号記録はないが、オックスフォードにその原型ができたのは、ヘンリー2世とフランスのフィリップ2世との間の争いにより、パリ大学の英国人学生が追放されこの地に集まってきた一二世紀後期と言われている。初代 Chancellor（総長）になったのは学者で修道士のロバート・グローステストである（一二二四）。その頃オックスフォードには四つの学寮、すなわちユニヴァーシティ・カレッジ、ベリオル、マートン、ダラムが設立されていた（現在は三九の学寮からなっている）が、当時はもっぱら聖職者のための神学と哲学が研究されていた。四つの教会と、四派の修道士会が存在していたが、これらは一五三八年にすべて離散した。一五一七年の宗教改革によるものである。

初期のOUP

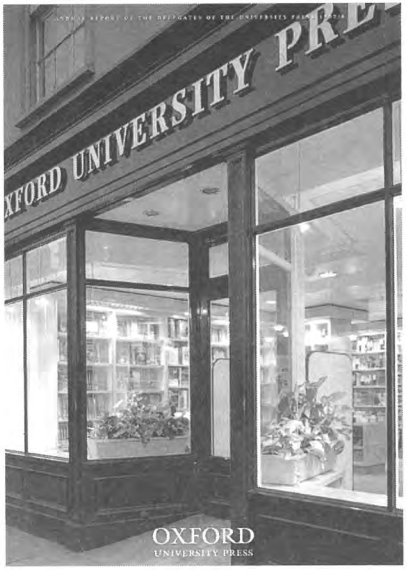
すでに一二一五年頃には大学で書籍を作る人々がいた。文房具（紙、インキ、筆など）で筆写する人、書籍を製本する人たちで、それらの道具は大学が用意していた。一四七八年にはドイツのケルンから最新の印刷技術を携えてオックスフォードにやって来た人物がいて、これが出版局の始めとなった。十二使徒信条や基礎的な学術書、オックスフォードで編纂した文法書が印刷された。しかしこれは私人による事業だったようで、経済的に破綻を来した。結局、一五八四年に大学が会議を開き、理事会の前身母体が結成されるのを待つことになる。これが一六三三年には Delegate（理事会）となり現在も続いている。出版局は大学と同じく Chancellor（総長）、Maters（学察長）、Scholas（学者）の所有となり、現在でも重要な事項、つまり、(1)何を出版するか、(2)出版局の運営をどうするかが、この会議で決められている。これは年度学期中八回ほど開催されている。一五八六年には星法院（一六四一年まで）から出版許可を受け、このとき多くの本が印刷された。ギリシャ

語の書籍（一五八六）、ヘブライ語の書籍（一五九六）、ボードリアン図書館初の蔵書目録（一六〇五）などであり、いまでも古書籍収集家の垂涎の的となっている。

聖書で繁栄の基礎を築く

一七世紀中期の内乱により、チャールズ一世の王宮がオックスフォードにおかれ、大学の印刷所で王党派の出版物や布告が印刷された。記録によれば、この時期はほとんど学術出版に寄与しなかった。一七世紀後期にはジョン・フェル博士（キリスト教会の主席司祭で後にオックスフォード教区の主教になった人、Fell Type としても有名）が運営管理に参加した。これがＯＵＰの真の歴史の始まりと言われている。彼はクォート判英語聖書の出版について、王室印刷所や書籍出版協同組合と長い交渉をつづけた。その結果、オックスフォード聖書と祈祷書については、特許状によりなかば独占的な出版権を取得。その後、学術出版を進めて行くうえでの重要な布石となった。

こうして、学術出版からはまたもや一時遠ざかることになるのだが、一八世紀には聖書の印刷所として大成功をおさめ、ロンドンには聖書専用の倉庫が造られるほどであった。一八九六年には聖書を販売するため、米国の拠点としてニューヨークに支店が設立され、一九〇九年には米国初のスコフィールド聖書が出版される。宗教書以外の出版に手をつけたのは一九二〇年になってからである。



ＯＵＰ直営書店を表紙にした
理事会の年次報告書

新たなる役割

現在ではプレスといえば報道機関や出版社そのものを示すが、その名の通り本来の中心機能は印刷所であった。草創期より事業の中心であったＯＵＰの印刷所も、数回の移転を経て、それ自体は一九八九年に閉鎖してしまった。歴史的役割を終えたのである。

ＯＵＰは現在、世界各地に一六の支店をもっている。それぞれの支店の立場で理事会の許可を得て、本社・支社の出版物の販売と同時にその地に合った出版活動を行っている。東京支店は一九五七年に代理店から始まり、一九六六年には日銀・文部省・通産省の許可を得て大学一〇〇パーセント出資による支店となった。最も新しい支店はスペイ

こちらはＯＥＤのＣＤ－ＲＯＭ版である

ン（一九九二）であり、各支店とも英語教育教材需要との相乗効果で大変な成功をおさめている。

最近の状況など

手元にある最新の資料から、いくつかの興味あるデータをあげてみたい。まず出版点数であるが、一九九七年の資料によると、この年は四五一七点が出版された。そのうち文学、社会科学、物理、化学、医療、音楽、芸術の他、雑誌、一般教養書も含む学術関連は、英国・米国で二四一四点、海外支社で三八三点が出版された。

一方、小中学校の教材、児童書を含む学校書籍は、英国・米国で四二八点、海外支社で八四八点であるが、海外支店の点数中には英語教育教材が大きなウェイトを占める。先にも触れたが、英語教育教材は今後も大いに点数を伸ばしそうな気配である。

売上は一九九八年に約二億九千万英ポンドに達しているが（1英ポンドはざっと１７０円）、その地域別構成比は概ね英国５：米国８：欧州６：アジア５：その他2となっている。同じ年の従業員数は、英国一三七七人、その他二四〇二人の計三七七九人に上る。

ケンブリッジ大学出版局（ＣＵＰ）が一九七六年に免税となって以降、ＯＵＰも英国で同じ待遇を受けることになり、大学へは寄付という形での貢献が行われている。その額は一九九七年に六五八六英ポンドであるが、そのうち五八六ポンド分は物納である。

以上でＯＵＰの全体像が見えてくると思う。最近は世界的なＩＴの普及と共に、一七〇以上の学術雑誌がオン・ラインにのり、ＯＥＤ（Oxford English Dictionary）もＣＤやＷｅｂ上で見るようになった。大学出版といえども他の商業出版社と同じように、著者との契約、販売力強化の必要性などにおいて、何ら特別視されることはない。学術の振興、宗教教育、情操教育、文化の発展に寄与する目的は今も将来も変わることはないであろう。※（ＣＵＰは一五八四年設立。現在二万点が入手可能、年に二四〇〇点の出版が行われている。ＣＵＰの理事会はシンディケートである。英国の輸出に貢献したことにより、ＯＵＰ・ＣＵＰともQueen's Award for Export を受けている）

海外の大学出版部関連記事　『大学出版』既刊より

五〇号に至るまでの間に、『大学出版』では、その時々の関心に応じて、海外の大学出版部の動向を追った記事を掲載してきました。そのなかから、各国の特徴がわかりやすく描かれているものを、以下に紹介いたします。

本誌の「これまで」の歩みを振り返るとともに、「これから」を読み解くための資料としてご活用ください。

アジア

■箕輪成男「**東南アジアの大学出版部（上）（下）**」（三六号〈98冬〉・三七号〈98春〉）

「大学教科書」「学術書」「大学出版部」という三本の小見出しにそって、フィリピン・マレーシア・インドネシアの大学出版部について詳述。鋭い切り口と豊富な情報量は、『大学出版』五〇号の歴史のなかでも逸品。

■麻子英「**中国の出版事業と大学出版社について**」（六号〈88秋〉）

北京大学出版社の社長が語った「中国の現実」。一九八七年創立当初の中国大学出版社協会の状況が報告されている。すでに八一校の加盟を誇っており、あらゆる出版社はすべて国家の承認を受け、「国営」だという。

アメリカ

■渡辺勲「**岐路に立つ大学出版部**」（四〇号〈99冬〉）、「**大学出版部と母体大学との関係**」（四一号〈99春〉）

一九九八年度アメリカ大学出版部協会（AAUP）総会に参加した際の寄稿。大学「経営」の論理で出版「経営」を取り込むことはもともと不可能であって、出版経営の成長は大学からの自立を必然化する、という認識の裏づけとなる、AAUP傘下出版部の「一九九七年度経営分析」（当時一一〇校のうち、回答率五五％）が貴重。

ヨーロッパ

■箕輪成男「**政治のなかの大学出版部**」（一八号〈93夏〉）

十六世紀イギリスに始まった大学出版部が、なぜイギリスで栄え、フランスでは発展をみなかったか。その両国比較から大学出版の歴史的背景を描き出す。本号特集の原点ともいえる。

■山本俊明・成田和男・木下正之「**ヨーロッパの大学出版事情**」（二二号〈94夏〉）

一九九四年春に「欧州主要国における大学出版事情調査と交流促進」を目的として、ベルリン・ウィーン・ナポリ・ローマ・ブダペスト・パリの五カ国六都市を訪問した際の報告記事。ヨーロッパの、大陸における大学出版事情についての数少ない報告である。

総論

■平川俊彦「**大学出版部小史**」『大学出版部協会30年の歩み』（一九九三年）

数世紀の歴史を有する大学出版部の起源、そして発展のプロセス、未来への展望まで、世界・日本の歴史的流れを概観。これを一読すれば、大学出版の歴史が眺望できる。

■ 科学する目 3

足の数

青木淳一

動物の体を支え、歩行に用いる器官を「足」または「脚」という。「肢」という字を使うこともある。正確には、「肢」のうちで地面につく部分を「足」、それ以外の部分を「脚」というのだが、ここでは便宜上すべて「足」を使うことにする。

二本足

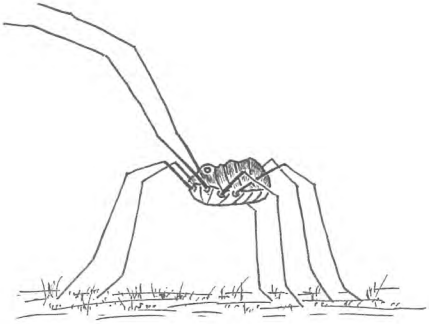
アオヤギなどの二枚貝の足を一本足と考えるかどうかを別にすれば、一番少ない足の数は二本である。私たち人間は二本足で歩くこと、つまり直立二足歩行を初めて行った動物のように思われているが、哺乳類のカンガルーだって後ろの二本足で移動しているし、多くの肉食恐竜も二足歩行をしていたようだ。その化石を見ると、前足は細く短く、一とても歩行には使えそうもない。もちろん、鳥類は全部二足歩行である。二足歩行の利点は歩行から解放された前足を他の用途、たとえば「手」や「羽」として使えるようになったことである。

四本足

三本足というのはないから、次は四本足である・哺乳類、爬虫類、両生類がこれにあたる。四足歩行の基本は、左前足と右後足を同時に前に出したあと、右前足と左後足を出すというやり方である。爬虫類も同じだが、哺乳類と違って腹が地面に着いている。しかし、哺乳類が走るときは左右の前足、左右の後足をそれぞれ揃えて交互に前に出すし、カエルが急ぐときは、四足を同時に使って跳ねる。

六本足

昆虫類の六本足はもっとも理想的な足の数と考えられる。かれらの歩き方を見ると、まず左前足＋右中足＋左後足を同時に前へ出し、次に右前足＋左中足＋右後足を前へ出す。つまり、常に三本の足が移動し、他の三本の足が地面に着いている。カメラの三脚を見ても分かるとおり、三本足というのがもっとも安定して倒れにくい。昆虫類はこの原理を見事に使い、体を常に完全に安定させながら前



図A　ザトウムシ

図B　ヤスデ

進する方式を採用しているのである。

八本足

クモ、ダニ、ザトウムシなどの蛛形類になると、足はもう二本ふえて八本になる。さて、かれらは八本の足をどのように動かしているだろうか。よく観察すると、多くのクモやダニは一番前の一対の足に「探る」ような動きをさせ、歩行には二番目、三番目、四番目の六本の足を使っている。つまり、昆虫と違って触角を持ち合わせないかれらは一番前の足を触角の代わりに使い、残りの六本の足で昆虫のように歩くのである。不思議なことにザトウムシの場合は二番目の足が一番長く、これに触角の役目をさせ、一番目、三番目、四番目の六本の足で歩く（図A）。タコも「たこの八ちゃん」といわれるように八本足であるが、八本をバラバラに動かす。急いで泳ぐときだけ、八本を揃えて同時に動かす。

十本足

イカのなかまでは八本足に長い二本足が加わって、合計十本足になる。

多足

つかまえても数えたことがないかもしれないが、ワラジムシやダンゴムシの足は十四本である。ゲジゲジの足は三〇本。ムカデは漢字で百足と書くが、実際には三〇本から三七〇本まで変化に富む。さわると渦巻きになるヤスデも足が多く、四十六本から三六〇本まである（図B）。

一体、神様はどうやって動物たちの足の数を決めたのだろうか？　私たちはたった二本の足でも時々からまったりするのに、百本以上もある足を順番にきれいに動かす虫を見ていると、不思議な気がしてくる。

（神奈川県立生命の星・地球博物館館長）

物流博物館

ＪＲ品川駅で降りて高輪口を出ると目の前を第一京浜が走っている。それを横切ると緩やかな坂道に差しかかる、これが通称「ざくろ坂」である。この坂を上り詰め左折するとすぐ左手に煉瓦色の、小振りながら瀟洒な落ち着いた佇まいの二階建の建物が目に入る。これが今回ご紹介する「物流博物館」である。駅からの所用時間は、パンフレットによれば七分となっているが私の足でも十分程度であった。足の便は大変良い。

「物流博物館」は財団法人利用運送振興会によって設立され、開館は平成十年八月十一日と比較的新しいがその前身は、昭和三十三年に日本通運株式会社本社内に設立された「通運史料室」に遡ると言うからもう半世紀近い歴史を有することになる。そういう事から、ここに収蔵されている資料の大半は日本通運株式会社の所有で、学術的にも評価の高いものが少なくないと言われている。

「財団法人 利用運送振興会によって設立された日本で初めての物流専門の博物館であり、現代における物流の役割やしくみ、また、今日に至る物流の歴史について、こどもたちをはじめ広く一般の人々に紹介することを大きな目的としている。とくに、現代の物流産業の概要をわかりやすく展示し、社会における物流に対する理解の促進を図ることが大きな使命である。」と、パンフレットに設立の趣旨が述べられている。

同館は地下二階、地上二階の構造になっており、「現代の物流」展示室と「物流の歴史」展示室、映像展示室の三つの展示室がある。観覧の順路として、先ず一階の「物流の歴史」展示室で物流の歴史の概略を理解されることをお勧めしたい。ここには、江戸時代以降の物流の歴史について館蔵資料が展示されている他、旧石器時代から現代までの物流史が年表にまとめられている。

次に、地下一階の「現代の物流」展示室に進む。先に設立の趣旨でご紹介したようにこの展示室が物流博物館の中心である。ここで観覧者の目を引きつけるの

開館時間　午前10時～午後５時
（入館は４時30分まで）
休 館 日　毎週月曜日（但し月曜日が祝日・振替休日の場合は、その翌日）
毎月第４火曜日、祝日の翌日
年末年始（12月28日～１月４日）
入 館 料　大　　人　200円（高校生以上）
小・中学生　100円（第２・第４土曜日は無料）
団　　体　20名以上半額

所 在 地　〒108-0074　東京都港区高輪4-7-15
TEL 03(3280)1616　FAX 03(3280)4385
http://www.lmuse.or.jp

が巨大なジオラマ模型である。陸海空の物流の結節点が実在する施設の模型で立体的に構成されおり、観覧者は、センサーの作動により物流現場の二十四時間をダイナミックに鳥瞰することができるようになっている。この他、見たい映像を自由に選べるビデオコーナー、物流クイズ、日本から世界各地に貨物を運ぶ物流ゲーム、物流関係の企業や団体にリンクが張られているインターネット等観覧者にとって興味深い展示物が盛り沢山である。

二階の映像展示室では大画面でビデオや16ミリの映像を見ることができる。現在は新しく制作した物流関係の映像作品を、毎日十一時と十五時の二回定時に放映している。しかし、団体での入館者がない場合等は、受付で申し込めばこの時間以外でも鑑賞できるそうである。この隣に、物流に関する図書や資料が閲覧できる図書コーナーがある。

ところで、筆者が訪ねたときは丁度「収蔵資料展―京都馬借・鉄道錦絵コレクション」と銘打った特別展を開催中であった。同館は開館後歴史が浅いこともあってか知名度を高めるために精力的に活動を展開している。今年はこれ以外に、大人向けの催し物として「美術品梱包講座」、「産業映画上映会」、「物流講演会」、「古文書講座」、等が計画されている。ただし日程、時間等は未定なので受講を希望する向きは事前に照会頂きたいとのことであった。

同館は小学生の見学者が多いのが特色の一つだそうである。これは、平成四年から小学校五年の社会科で物流が大きく取り上げられるようになったためであるらしい。そのため夏休み期間中には、「お宝を包んでみよう」とか「ひっこし大作戦」、「ダンボール工作」等の子供向けの催し物が企画されている。

このような事もあってか「物流博物館」は、観覧者に人の温もりを感じさせる博物館である。交通の便も良い所に立地しているので、ご家族連れで足を運んでみられてはいかがであろうか。

（流通経済大学出版会　加治紀男）

大学出版部ニュース

▼「第六回拡大編集部会」を開催する

「第六回拡大編集部会」が七月一三日（金）・一四日（土）の二日間、千葉県柏市にある麗澤大学内れいたくキャンパスプラザにて開催された。

今回は「編集者の意識革命―テキストデータ有効活用の手法」というテーマで、未來社代表取締役社長の西谷能英氏を迎え、先般西谷氏が出版し話題となった『出版のためのテキスト実践技法／執筆編』についてお話しいただいた。

パソコンデータでの原稿が増えた今日編集者の一つの方法として、パソコンの能力を最大限活用し、現在あるムダを極力無くそうという試みである。著者はもちろん編集者にも高度なパソコン操作は要求されていない。これにより編集者は原稿の通読に集中できる環境をつくれ、原稿の段階でほとんどの修正が可能となる。さらに印刷所にはもっとも作業しやすい状態の原稿データを渡すため、時間とコストの大幅削減を可能としている。

二五名の参加者は、熱心に西谷氏の話に耳を傾け、講演後の質疑時間では活発な意見が交わされ、とても有意義な時間となった。終了後は開催場所である麗澤大学関係者を交え懇親会が催された。翌日には麗澤大学校内にある廣池千九郎記念館などの見学も行われた。

▼移動編集部会――製本所見学

六月一六日、「二〇〇一年度第一回・移動編集部会」が開催された。今回の訪問先は埼玉県朝霞市の石津製本所。編集者にとって、日頃接することの少ない製本工場の見学と、束見本製作の体験とあって、在京の編集部会担当者を中心に一三名が参加した。

代表取締役社長の石津義治氏自らの案内と説明により、ライン上で自動化された、折り、丁合、断裁、しおり付け、丸味出し、背固め、仕上げなどの全工程を見学した。そこにはかつての人海戦術という印象はほとんどない。

その後の束見本製作体験では、手作業でいくつかの工程を行った。丸味出しなどの慣れない作業に皆手間取りつつも、何とか形にはなった――もちろん、売り物にはならないが……。

見学後には、質疑応答の場が設けられており、日頃の疑問に丁寧な説明で答えていただいた。紙や印刷が製本に及ぼす影響についても話が及び、有益な移動編集部会となった。

北海道大学図書刊行会

▼田中彰著『**北海道と明治維新**』(四六判・二五〇〇円) 激動の幕末・維新期の北海道を辺境の視点から描き出す。中央＝内地からは見えてこない、新しい歴史の姿! 巻末に箱館戦争の知られざる記録『蝦夷事情乗風日誌』を収録。

▼北大125年史編集室編『**北大の125年**』(A5判・九〇〇円) 写真・資料・コラムなどを盛り込み、学生生活の実態など新しい視角から125年を通観した初めての北大小史。21世紀のスタートにあたり、若い世代の読者に送る!

▼近 昭夫・藤江昌嗣編著『**日本経済の分析と統計**』(A5判・四四〇〇円) 現代日本の経済と社会が抱えている基本的な諸問題について具体的に把握し、分析する。「統計と社会経済分析」シリーズ最新作。本書で全4巻完結。

▼畠山武道著『**自然保護法講義**』(A5判・二八〇〇円) 自然公園法・鳥獣保護法などの自然保護法のほか、河川法・砂利採取法など公共事業法も取り上げ、その仕組みを検討。環境権・公共信託・生態系保護・住民参加という4本の柱を軸に、個々の法制度の問題や今後の方向を示す。

聖学院大学出版会

▼フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ著・深井智朗編訳著『**ウェーバー・トレルチ・イェリネック——ハイデルベルクにおけるアングロサクソン研究の伝統**』(四六判上製・定価未定)

ヨーロッパ近代を理解するときに欠かすことのできない文献にトレルチ『近代世界の成立におけるプロテスタンティズムの意義』、ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、イェリネック『人権宣言論争』がある。これらは分野やアプローチは異なるものの、アングロサクソン世界に展開した「プロテスタンティズムの意義」に注目している。

本書は、ミュンヘン大学教授のフリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ教授を招いて開催された国際シンポジウム「ハイデルベルクにおけるアングロサクソン研究の伝統」の記録である。グラーフ教授の講演に、東北大学教授・柳父圀近氏、聖学院大学・田中豊治、阿久戸光晴、梅津順一氏のコメントを収録している。

新たに、京都大学法学部教授・初宿正典氏の「近代ドイツとデモクラシー——イェリネックを中心に」を掲載した。

麗澤大学出版会

▼吉村作治著『**ひとのちから**』(本体一四〇〇円)

異色のタイトルである。これほど直截な題名は類がないかもしれない。「名は体を表し」て、スタイルは簡勁であり、問題提起は単刀直入、主張は明解である。

いま日本社会を重く深く覆っている閉塞感に風穴を穿ち、崩壊に瀕している社会システムを再構築する手だてはあるか。著者の答えは「イエス」だ。ただ、この未曾有の危機的状況に求められるべきは、「集団」の力ではなく「個」の力——根源的な「ひとのちから」だと著者は言う。

本書の意図は、広範な読者に向かって意識変革を迫ることにある。とはいえ、五千年の人類史を閲し、三五年にわたりエジプト発掘を続けてきた著者一流の文明史観が随所に光彩を放っている。小会が、あえて世に問う所以である。

『ひとのちから』
本体1,400円(税別)
四六判・上製・220頁

慶應義塾大学出版会

▼弊社のウェブサイトが新しく開設されました（http://www.keio-up.co.jp）。是非ご活用ください。

▼〈日韓共同研究叢書〉③・④刊行。朴忠錫・渡辺浩編**『国家理念と対外認識―17世紀―19世紀―』**（三八〇〇円）、小此木政夫・文正仁編**『市場・国家・国際体制』**（三八〇〇円）。今回は「歴史（前近代）」と「政治経済」分科会の研究成果。

▼大森真紀著**『イギリス女性工場監督職の史的研究―性差と階級―』**（四五〇〇円）は、イギリス工場法の実効を確保するため、一八九三年に設置された女性監督職が、中流階級女性の仕事として認知・確立されていく過程を克明に分析。世界に先駆けたイギリスの社会政策を、従来の制度論を超え、性差（ジェンダー）の視点から検証し、わが国の研究水準を飛躍的に高めた画期的研究。

▼法律の基本テキスト2冊刊行。宗田親彦著**『新訂　破産法概説』**（四六〇〇円）、松尾弘著**『民法の体系―市民法の基礎―［第2版］』**（四〇〇〇円）。いずれも、定評のある旧版を、最新の判例・学説に基づき全面改訂。

産能大学出版部

安森寿朗著**『21世紀自動車販売「勝者」の条件』**（一八〇〇円）本書はフォード社で自動車マーケティングを学び、日米欧の自動車流通生産性を深く研究している著者が、国内外の高収益販売会社を取材。そこから本当の顧客サービスとは何か、顧客を大切にする販売店経営とは何かなど、二一世紀の自動車販売店の勝者になるためのノウハウを提供する。

二味巌著**『未来創造戦略』**（一八〇〇円）激動する二一世紀の危機に挑戦し、これに勝ち抜くためには、低成長に対処する戦略経営（未来創造戦略）、多元化に対処する選択経営（特化・集中戦略）、不確実に対処する機動経営（不測事態対応戦略）を基本とするメガトレンド経営によって（中略）実証的成果を上げ、国際社会の発展と人類の幸福増進に寄与しなければならない。本書は、そのための極めて具体的な実戦的手法を、永年にわたる著者の実務経験とその実証的成果に基づいて展開しようとするものである。

専修大学出版局

▼森宏編**『食料消費のコウホート分析』**（四八〇〇円）社研叢書の第二弾。各年齢階級別の食料消費の推計を行い、若者の果物離れに代表されるような激変する日本の食料消費の実態を詳細に分析する。

▼宮下誠一郎著**『ソ連・ロシア、東欧の政治と経済』**（二八〇〇円）ロシアは共産主義というそれまでに無かった体制を実践しこれを葬り去った。本書はその政治・経済の歴史の流れを丹念に追っている。

緊急出版▼藤本一美著**『クリントンの時代―1990年代の米国政治』**（二八〇〇円）つい先ほどまで米国を担っていたクリントン政権は、どんな特色を持ち、いったい何者であったのか。主として、政策・選挙・政治資金・夫婦の問題より観察。二一世紀を展望する材料ともなる。最新稿「ヒラリー・クリントン」が補論に付く。

玉川大学出版部

一九九一年の大学設置基準の大綱化に始まった「改革の一〇年」で、大学はどう変わったか。さまざまな視点で迫る、「高等教育シリーズ」の今年度前半に刊行した新刊三点を紹介する。

▼市川昭午『**未来形の大学**』（二八〇〇円）　大学とはいかなるものであるべきなのか。近代大学の理念を失った大学に未来はあるのか。大学制度の実像とはいかなるものか。大学教育制度全般を俯瞰しながら、現代大学のゆくえを論ずる。

▼島田博司『**大学授業の生態誌―「要領よく」生きる学生―**』（二四〇〇円）　キャンパスで何が起こっているか？　なぜ授業を聞かず、ノートもとらないのに単位をかせげるのか？　ノートとりと座席とりに焦点を合わせながら、現代の大学授業の実状を浮き彫りにする。

▼天野郁夫『**大学改革のゆくえ―模倣から創造へ―**』（二四〇〇円）　アメリカの大学を模倣し改革を進めてきた日本の大学だが、先駆者を理想としつつ現実をふまえた新しい大学像を創造すべき段階にきているのではないか。新世紀を迎えた日本の高等教育の明日を読み解く。

中央大学出版部

▼河原　温著『**中世フランドルの都市と社会―慈善の社会史―**』（四〇〇〇円）　西欧中世のキリスト教的慈善から社会政策としての近世的慈善への変化のプロセスを、フランドル都市ヘントを中心に描き出す。西欧中世の都市社会が近世に先立ち経験した貧民・弱者をめぐる社会的保護と規制の特質を追究。

▼鳴子博子著『**ルソーにおける正義と歴史―ユートピアなき永久民主主義革命論**』（三五〇〇円）　ヘーゲルやマルクスの体系をも内包するぐらいの壮大なスケールを持ったルソーの理論を謎解き、生きた理論として蘇生させる。さらに民族・宗教・ジェンダーなどの諸問題に多元・共存論とは区別される新しく柔軟な共同理論を提起しうることが示唆される。

▼手島茂樹著『**海外直接投資とグローバリゼーション**』（三四〇〇円）　投資企業の国際競争力の強化に資し、投資母国・受入国双方にとってプラスの役割を果たすはずの、直接投資を通じたグローバリゼーションが、八〇年代以降の日本企業の場合、現実にどのようなプラスの効果、またはその限界があったかを見極める。

東海大学出版会

東海大学の創立者・松前重義は一九〇一年、熊本県で生まれた。学校法人東海大学では、創立者の生誕百年にあたる本年を、学園建学の理念を再認識する好機と位置付け、「松前重義生誕百年記念事業」を実施する。記念事業の内容は、『**松前重義手稿影印集**』・『**松前重義全集**』の刊行、全国巡回パネル展示会の開催、ビデオ製作、記念式典、祝賀会、ソフィア少年少女合唱団による記念公演などが予定されている。これらの事業は、単なるお祝い事として展開されるのではなく、建学の真の理念を再確認し、学園の未来につなげるべく計画されている。

『松前重義手稿影印集』は、松前重義自筆の手紙や原稿、詩や短歌、日記など二十八点を原本に忠実に再現し、それら手稿に込められた思想、あるいは時代的・社会的背景を中心とした解説を付す。

『松前重義全集』は、松前重義の著書や論文を中心に、活字となって公に発表された文章すべて網羅することを目指す大プロジェクトである。現段階では最終的に全何巻になるかも、完結時期も未定である。

東京大学出版会

明治国家が立ち上げられたのは、「パクス・ブリタニカ」の世界史空間だった。以来、日本の近代はこのイギリスという国に大きく規定されてきた。近世以来の日英関係史に、日英両国の一線の研究者が、包括的・多角的視座と方法から最新の知見を提供し、共通の歴史認識を探る▼シリーズ「**日英交流史1600―2000**」【全5巻】が、このほど完結。1巻・2巻（木畑洋一、イアン・ニッシュ、細谷千博、田中孝彦編）『政治・外交Ⅰ・Ⅱ』、3巻（平間洋一、イアン・ガウ、波多野澄雄編）『軍事』、4巻（杉山伸也、ジャネット・ハンター編）『経済』、5巻（都築忠七、ゴードン・ダニエルズ、草光俊雄編）『社会・文化』。A5判・平均三六〇頁、本体価格四六〇〇円～五〇〇〇円。

東京電機大学出版局

政府が行っているIT講習が大人気である。特にこれまでパソコンを敬遠しがちだったシニアや主婦の関心の高さがうかがえる。ビジネスだけでなく、情報発信やコミュニケーションの新たな手段として、パソコンへの期待は大きい。

熟年層のパソコン初心者のために、目的別に入門書を刊行した。いずれも文字を大きくし、読みやすさにも配慮した。

▼**『シニアのためのパソコン力養成ゼミ―ITニュースまるわかり』**（一八〇〇円）パソコンとはどんなもので、何ができるのか。IT関連の基礎知識をやさしく解説。パソコンが身近になる一冊。

▼**『シニアビジネスマンのためのパソコン』**（二〇〇〇円）Word・Excel・電子メール・インターネットなど、ビジネスで必要となる項目を厳選。具体的な例題による解説で、実務に即活用できる。

▼**『ひとりでできるIT講習　入門編』**（一五〇〇円）関心の高いインターネット、電子メール、文字入力に的を絞り、基礎の基礎から解説。11月発行予定の応用編では、Word・Excel・年賀状・デジカメ等を取り上げる。

東京農業大学出版会

〈カラー写真集一〇〇シリーズ〉

ヴェトナム一〇〇の素顔　―もうひとつのガイドブック―

国際食料情報研究所編

ヴェトナムの自然には独自の風景がある。人々の生活に明るさとバイタリティがある。そこには働きものの女性がいる。平成一三年四月刊／B六判／一五二頁／本体価格一六〇〇円

イスラエル一〇〇の素顔　―もうひとつのガイドブック―

歴史、伝統、宗教、そこには奥深いものがある。民族の生き様が読み取れる。見て、聞いて、触れて、そして感じたことを各隊員が語る。平成一三年四月刊／B六判／一三六頁／本体価格一六〇〇円

オホーツク一〇〇の素顔　―もうひとつのガイドブック―

東京農大オホーツクキャンパスが網走市にある。北の大地・海の四季、地域文化を紹介。カラー写真とコンパクトなエッセイがいい。平成一三年七月刊／B六判／一三七頁／本体価格一六〇〇円

法政大学出版局

《ものと人間の文化史》／既刊一〇〇点！

▼《ものと人間の文化史》は、従来の政治・経済を中心とした歴史記述にとらわれず、人間がつくりあげてきた生活の営みを〈もの〉や自然とのかかわりにおいてとらえ直そうとする遠大な試みです。▼一九六八年に第一回配本『船』（須藤利一編）でスタートして以来、本年六月刊行の『瓦』（森郁夫著）をもって既刊は一〇〇点・一一八冊となりました。▼これを記念して品切れ書目を復刊し、全点を揃えましたのでご案内いたします（内容見本送呈）。▼また、九月上旬～一〇月にかけて、全国の有力書店二十三店舗にて記念のフェアを開催いたしますので、お誘い合わせの上、お運びいただければ幸いです。

放送大学教育振興会

▼放送大学大学院は平成十四年四月開講

放送大学大学院は、職場や生活の場を離れることなく、高度な専門的学識及び知的技能を習得できる大学院を提供するとともに、キャリア・ディベロップメントに資する教育を行う、「開かれた大学院」を理念としている。

▼四つのプログラム　一研究科「文化科学研究科」、一専攻「文化科学専攻」の下に、現代の社会的要請に対応した柔軟な四つのプログラムを設けており、「総合文化プログラム」（文化情報科学群・環境システム科学群）「政策経営プログラム」「教育開発プログラム」「臨床心理プログラム」から成る。

▼授業・研究指導　放送授業番組と印刷教材を組み合わせて授業を行い、研究指導は、対面による直接指導、テレビ電話、電子メール等で行うことになる。

▼七月十三日、平成十五年度開設改訂予定科目の主任講師会議が開かれた。専任教員・客員教員、ディレクター、編集担当者等が、全体会議、専攻別部会に出席した。これで平成十五年度印刷教材編集作業が正式にスタートした。

明星大学出版部

▼塚田紘一著『**子どもの発達と環境――児童心理学序説**』本体価格二三〇〇円

近世に至るまで、子どもは「大人の小さい者」と考えられていた。しかしながら、ルソー（Rousseau, J-J.）の子どもを中心にすえた児童観によって児童は研究対象になる。ルソーは『エミール』の中で「子どもは大人と違ったもの」であり、不完全な大人としてではなく、子どもとして理解されなければならない存在である」と提言した。大人はかつて子どもだったために子どもの心をあたかも知り尽くしていると誤解していた。その誤解を解き、児童の心理が科学的に研究され始めたのは、わずか百余年前に過ぎない。それから児童心理学は日進月歩に発達する。本書では児童心理の最新情報を解説。（目次―抜粋―）第一章　発達の基本的理解、第二章　児童研究の方法、第三章　発達初期の展開、第四章　身体と運動機能の発達、第五章　認知発達、第六章　知能と創造性、第七章　情緒・動機、第八章遊び、第九章　社会性、第十章　自己意識、自己概念、第十一章　親の児童観と教師＝生徒間の信頼関係。

早稲田大学出版部

▼**『日本の選挙［増補版］』**（福岡政行、二八〇〇円）無党派層の政党選択、二〇〇〇年四二回総選挙分析、小泉ショックと自民党、をはじめ政治環境の変化と有権者の変貌を明らかにする。

▼**『民族共存の条件』**（日本比較政治学会編、同学会年報第3号、三〇〇〇円）ボスニア、アゼルバイジャン等の紛争の実態を分析し、民族共存の可能性を探る。

▼**『掛詞の比較文学的考察』**（小林路易、九五〇〇円）掛詞を同音の二語による押韻として捉え直し、和歌に西洋詩学の光を当て日本古典文学の韻の構図を解明。

▼**『科学技術の英語――IT時代の英語の読み方・書き方――』**（篠田義明編著、二〇〇〇円）状況に応じて英文を適切に「読み、書く」にはどうしたらよいのか。豊富な例文と練習問題により解説する。

名古屋大学出版会

▼石川九楊著**『日本書史』**（一五〇〇〇円）東アジアの文化の根底をなす書は、「弧島」の舞台でいかなる劇を繰り広げたのか？　古代から明治初年までの代表的作品の丹念な解読によって、日本書史の全体像を提示したライフワーク完成！

▼P・シェットラー編　木谷勤・小野清美・芝健介訳**『ナチズムと歴史家たち』**（四二〇〇円）アカデミックな歴史学による広範な協力の実態を初めて描き出し、社会史など戦後歴史学の起源に大きな疑問符を投げかけた注目の研究。

▼毛里和子・毛里興三郎訳**『ニクソン訪中機密会談録』**（三二〇〇円）今日の米中関係の出発点となった毛沢東、周恩来、ニクソン、キッシンジャーによる世紀の外交交渉の全貌。一九七二年、厳冬の北京で四人の巨人は何を語り合ったのか？

▼塚田弘志著**『デリバティブの基礎理論――金融市場への数学的アプローチ』**（二八〇〇円）デリバティブの価格決定についての理論を統一的な視点から整理するとともに、複雑に見える理論の基本構造とその経済学的意味を見通しよく記述した本格的解説書。

京都大学学術出版会

▼**『植えつけられた都市』**ロバート・ホーム著／布野修司他訳・五二〇〇円／先進諸国の都市計画の源は、実は植民地における経験にある。世界的な都市計画史家として知られる著者が、広く植民都市の歴史を振り返りながら、その遺産を評価し継承することで、今日の「都市問題」の解決にも通じる重要な示唆を与える。都市計画者の生き生きとした評伝としても優れた、都市史・世界史必携の研究書。

▼**『建築と私』**高松伸編・二九〇〇円／近代建築はすぐれて社会的存在である。だからといって、そこでは建築家が、自身の思想をその作品中に実現するのは難しいのか？　日本を代表する建築家が、建築における「私性」を正面から論じる。京大工学部での「建築論」講義の集成。

▼**ピンダロス『祝勝歌集／断片選』**内田次信訳・西洋古典叢書Ⅱ-13・四四〇〇円／古代ギリシア最大の合唱抒情詩人ピンダロスの神韻を流麗な日本語で訳出する。「オリュンピア」「ピュティア」など四大競技大会の優勝者を称える四篇の祝勝歌のほかに、ディテュランボスなど現存する貴重な断片も収載。本邦初完訳。

大阪経済法科大学出版部

▼『**経営倫理論**』金元銖著／三五〇〇円
著者は韓国の経営学の重鎮であり、企業の技術的合理性に偏った論理的意志決定を主とすることに対し、倫理的意志決定の重要性を力説する。「人間と倫理」から「経営倫理」と展開され、企業の組織的意志決定も最終的には個々人の倫理意識に依拠し、それを組織としてどう具現化するかを論述する。経営学を学ぶ学生に倫理的意思決定の重要性を認識させると同時に、倫理意識を高めるために倫理の問題を企業経営と関連させまとめる。企業倫理・社会的責任が問われる昨今、本書は経営倫理のあり方に多くの視座を与える格好の入門書。
第一編　経営倫理論の学問的性格／第二編　人間と倫理／第三編　経営倫理／第四編　経営倫理教育論。

▼『**ザ・情報化社会への情報科学**』沢勲冨川国広著／三〇〇〇円／初めてコンピュータを習得する人や情報科学を学ぶ人を対象に、コンピュータの基礎であり必須科目であるハードウェアやソフトウェアの基礎知識と応用技術をまとめる。イラスト、図表等を多く掲載。

大阪大学出版会

▼大阪大学創立七〇周年の記念出版「**大阪大学新世紀セミナー**」を毎月順調に発刊している。最近の話題性豊かな先端研究をわかりやすく解説したこの叢書は、A5判・九六頁・本体一〇〇〇円、これまで一四冊を刊行している。
▼6月刊＝真田信治『**関西・ことばの動態**』は関西弁の最近の変化を分析。高杉英一編『**素粒子と原子核を見る**』は反物質とかニュートリノという言葉を少しでもわかるために。7月刊＝黒沢満『**軍縮をどう進めるか**』はあらゆる兵器をなくすための努力と理解。天谷喜一・三宅和正・北岡良雄『**新しい超伝導を求めて**』8月刊＝平田健治『**電子取引と法**』、西原力『**環境と化学物質―化学物質とうまく付き合うには―**』以後続刊。

大阪大学新世紀セミナー

関西大学出版部

▼北岡正子著『**魯迅　日本という異文化のなかで**』（三八〇〇円）多感な青年時代、留学生として体験した〝日本という異文化〟が魯迅に「愛国青年」としての決意を促した。主体形式の核となった決意の誕生までを跡づける。日本に残る明治期の関連資料を発掘して魯迅の留学環境を再現、神格化を排して歴史化を試みる。
▼小谷節男著『**アメリカ自動車工業の研究**』（三五〇〇円）発展過程の分析では「寡占の原型」を明白にする。寡占市場の再編では戦後の参入と整理統合を解明する。海外進出では技術と規模の優位性に基づき、輸出から現地組立を経て現地製造に至る過程を述べる。グローバル寡占の形成ではダイムラークライスラーの誕生とGM、フォードの世界戦略を究明。
▼樋口欣三著『**十八世紀イギリス小説の視点**』（二六〇〇円）デフォーからオースティンへと続くイギリス小説は、人が近代社会で個としての自覚を獲得していく姿を描くが、それは信仰より世俗的欲望に心を向ける人間を描くことでもあった。幸福、富、家族という主題に焦点をあて、十八世紀小説を読み解こうとする。

九州大学出版会

▼長崎大学文化環境／環境政策研究会編『**環境科学へのアプローチ―人間社会系―**』（A5判・四一〇頁・二八〇〇円）環境問題の全体像を把握して、解決を目指す、新たなる「環境科学」という学問の真の確立を模索する。自然の価値探索と人間環境系のデザイン手法。

▼中山將・高橋隆雄編『**ケア論の射程**』〈熊本大学生命倫理研究会論集2〉（A5判・三二〇頁・三〇〇〇円）哲学、倫理学、日本思想、社会学、看護学の立場から、原理的な事柄と制度的問題とを連関させ、現代におけるケア論を展望する。

▼清水孝純著『**新たなる出発―『カラマーゾフの兄弟』を読むⅢ―**』（四六判・四一〇頁・三四〇〇円）愛欲の極限をゆく魂と、ニヒリズムから狂気に至る魂と、それらを包む謙抑の魂と、それらが織りなす世界文学最大の劇的空間の解読。全3巻完結。

▼高橋和雄著『**雲仙火山災害における防災対策と復興対策―火山工学の確立を目指して―**』（A5判・六〇八頁・七八〇〇円、二〇〇〇年二月刊）によって、平成十二年度土木学会賞・出版文化賞を受賞。

東北大学出版会

▼加藤尚武編著『**共生のリテラシー**』（A5判・並製・二二六頁・一五〇〇円）

地球温暖化、オゾン層破壊、砂漠化、森林破壊、資源枯渇、人口爆発などの環境問題は、全人類の存亡をかけた重要問題である。これらの問題の解決には技術的な対処では不十分で、文明の在り方そのものを問い直すことが必要となる。本書では、哲学・倫理学の立場から、自然、権利・平等の思想、正義をテーマにして、私達の生き方に反省と分析を加え、「共生」という新たな絆となる思想を織り出す。環境倫理の研究・勉学に必読の書。

▼西田秀穂著『**パウル・クレーの芸術―その画材と技法と―**』（B5判・並製、二五一頁、四二〇〇円）

水彩画家、油絵画家、版画家、線描家として有名なパウル・クレーは、カンヴァスや絵の具、鉛筆といった画材に固有のこだわりを持っていた。また、独特の技法を用いたことでも知られている。本書は、クレーの画材と技法の変遷を跡づけ、人間性を掘り下げていく。カラー写真六五枚、白黒写真一三〇枚を掲載する美術書。

流通経済大学出版会

▼『**足るを知る経済のすすめ**』（近刊）

わが国は明治以後、西洋近代文明を追いかけてきた。そしてそれは、高度成長末期の一九七〇年代にほぼメドがついた。近代化という暗黙の「国民的大目標」のもとに、わが国はそれを立派に成し遂げた。が、その後の四半世紀は、単に惰性で経済成長を求めたに過ぎない。大目標がなくなり、小目標しか意識し得なかったからだ。小目標とは、たとえば「前年比で何％売上げを増やすか」といった、きわめて矮小化された目標である。その事に汲々としていれば、人間、狂ってくる。バブル経済もその例だ。世界一ともいえる豊かさを実感できず、ココロの豊かさというものを忘れ、日々、モノやカネへの欲望ばかりを追いかけていれば、狂ってきても当然である。それを見て育つ子供も狂ってくる。昨今のニュースはそんな事件で溢れている。もうこの辺で、方向転換してはどうだろうか。今、「知足経済（足るを知るということを基礎にした経済）」ともいうべき新しい経済体系を確立することが喫緊の課題である。

三重大学出版会

「(続)故郷の動物」冨田靖男著（A5判、二四二頁、一九九五円）

三重県博物館長を務めた著者が長年にわたる調査研究に基づいて執筆した同県内の動物の生態に関する記録である。朝日新聞地方版に掲載されたものを、野外観察用に編集したもの。

前著「故郷の動物」（一九九〇年七月刊）では哺乳・爬虫・両生類を対象としているのに対し、本書ではエビ、カニ、ヤドカリ、ウニ、ナマコ、ヒトデ、カイ、イソギンチャクなどの海産動物や昆虫類など、一一六項目を取り上げている。

サブタイトルにもあるように、「ネーチャー・ウオッチングの手引き」として活用できるよう、一項目見開き二頁で構成されており、各項目には、一点以上、計二四二点の写真と、種あるいはグループの形態的、生態的特徴、分布等のほか、必要に応じて食味等についても解説している。タイトルでは「故郷の」とある通り三重県に棲息する動物の棲息報告だが、分布北限種等一部の種を除くと、大半は国内に広く棲息する動物であるため、広範囲に活用できる本である。

関西学院大学出版会

▼圓田浩二**『誰が誰に何を売るのか―援助交際にみる現代社会の性・愛・コミュニケーション』**（四六判上製・三三〇頁・三八〇〇円）

援助交際とは何か。男と女の間でほんとうは何が交換されているのか？　現代社会における性・愛・コミュニケーションを綿密なフィールドワークに基づいて検証する。

▼阿部周造編著**『消費者行動研究のニュー・ディレクションズ』**（A5上製・二一二頁・四五〇〇円）

今日の消費者行動研究における理論構築の可能性を示す。

▼ジム・コンセディーン／ヘレン・ボーエン　前野育三監訳**『修復的司法』**（A5並製・二八八頁・二八〇〇円）

犯罪被害者への配慮と加害者の立ち直り援助を両立させるにはどうすればよいか、ニュージーランドでの実践例から学ぶ。

▼上村敏之**『財政負担の経済分析―税制改革と年金政策の評価』**（A5上製・二八〇頁・三六〇〇円）

「財政構造改革」でなされた税制改革、年金改革を分析、評価する。

ウェブサイト委員会ニュース　http://www.ajup-net.com/

▼本年二月九日、北海道大学図書刊行会にウェブサイトが開設されました。URLは、http://www.hup.gr.jp/です。内容は新刊案内、総目録、リンク集などで、写真集や図鑑は、美しいサンプル画像を見ることもできます。

▼リニューアルのため休止していた慶應義塾大学出版会のウェブサイトが、本年六月五日、装いも新たに再開しました。URLは、http://keio-up.co.jp/です。フリーワード検索やバスケット方式による直接注文ができるなど、本格的なサイトです。

▼大学出版部協会ウェブサイトでは、近々、読者や協会メンバーに向けたメッセージを、幹事長（渡辺氏）・副幹事長（山本・市川氏）が毎月交替で執筆・掲載することになりました。ご期待下さい。

▼なお、ウェブサイト委員会では、各出版部から連絡委員を選出していただき、更新のお知らせなどをメールにてお送りしていますが、協会ウェブサイトに対するご意見・ご要望、また各出版部の掲載記事内容の変更（所在地、電話・FAX番号、役員名）なども、連絡委員を通じてフィードバックしていただければ幸いです。

■僕らが子供のころ、「偉人」の代表者といえば発明王エジソンだった。しかし最近になって、その「発明」の多くはエジソンのオリジナルではなく、先人の基礎研究の応用や、別人の発明の改良に過ぎないといわれることが多くなった。とはいえ、応用や改良に価値がないかといえばそうではあるまい。実用化され、誰もが使えるようになってはじめて、その「発明」は意味を持つのだから…。

■前号で「タグ」氏が取り上げ、僕も簡単に触れた西谷能英氏の『出版のためのテキスト実践技法［執筆編］』はおおむね好評のようだが、一方では批判もある。たとえば前田年昭氏は、専用ワープロ全盛の時期から現在のパソコンにおけるワープロソフトの時期にいたるまで、組版・印刷業の現場ではMS-DOSテキストファイルを介して互換をとるようほぼルール化され、ほぼ二〇年近く経つ。いまさら「出版業界初の提言！」「革命的テキスト技法」（帯）という、どこに新味があるというのだろうか。

とウェブ上で発言している。

■じつは僕自身、『朝日新聞』の紹介記事を読んだときには、「どこが革命的なのか」という印象を拭えなかった。しかしよく考えてみると、この本はかなり革命的なのである。「革命的」は言い過ぎだとしても「新味」はある。確かに「組版・印刷業の現場で」テキスト処理の方法がルール化されていることは事実だろうが、出版界では、とりわけ人文系の執筆者と編集者の間では、ルールなど何もないに等しい。そしてこの本は、主としてその、「人文系の執筆者」を対象に書かれた本なのだ。

■これまで、デジタルテキストの扱いについて、人文系の執筆者を対象に書かれた本はあまりなかったように思う。各社それぞれのマニュアルのようなものはあるだろうし、僕自身書いたこともあるが、それを市販して、出版界共有の財産にしようという発想があっただろうか？　西谷氏の主張は、「発明」ではないけれども、すぐれた「応用」であり「啓蒙」なのだ。

■「編集者がパソコンをいじりはじめると企画がおろそかになる」などという、いいかげん聞き飽きた反論もあるが、企画だけをやっていればいい編集者など、日本にどれだけいるのだろうか。編集者が割付をし、校正を読み、時には装幀まで手がけるのが、中小・零細出版社ではむしろ普通のことだ（しかも、出版社というのはほとんどが中小・零細なのである）。そのための道具として、パソコンが役に立つのであれば、積極的に使えばいい。そして、どうせ使うのなら、より効率的な使い方を考えることが悪いはずはない。

■著者にしても同じである。たとえチラシの裏に手書きしてあっても、本当に必要な原稿であれば拒否する出版社はないだろう。しかし、せっかくワープロやパソコンを使うのなら、後々の処理が楽な方がよい。しかも、西谷氏が主張する、テキストエディタによる執筆は難しいことではない。一太郎やWORDのような高機能のワープロソフトを使うよりも、はるかに楽で、費用もかからないのだ。

■西谷氏が書いている原稿記述上の約束事は、必ずしも一般性があるとはいえない。また、僕としては疑問を感じる箇所がないでもない。しかし大事なのは、このような試案が公開の場に提示されたということだ。それを切って捨てるような発言は非生産的である。西谷氏の本を叩き台として、出版業界と印刷業界の双方に常識として（打ち合わせや説明抜きで）通用するテキスト処理のマニュアルが誕生することを期待したい。（不労平）

製作の現場から［25］

西谷氏の本を叩き台に…

デジタル出版最前線［3］

オンライン授業がフリーになる

■大学教員が原稿を書く場合、学校の自室で備品のパソコンを使っている人が多いのではないだろうか。特に教科書の場合は、執筆に先立つ何年間の授業での成果、つまり講義ノートをもとにすることが多い。教員は教育することで大学から給料をもらっており、普通の感覚からいえば法人著作である。一方、出版社は授業に則した教科書執筆を依頼し、履修学生数を基礎票に安定的な出版をめざしてきた。

■おそらく予備校は教員の執筆に何らかの制限があるだろうし、教員の印税や講演収入を管理しているビジネススクール的な大学も例外的にはある。が、通常、大学教員が教科書を執筆し、その本の著作権者になることは教員の自由であり、日本でも欧米でも問題になることはない。教科書出版社も自由に出版活動を行ってきた。

■一方、講義の著作権は誰のものか。教科書にすれば教員のもの。しかし、教員が所属する学校以外で講義を受けもつ場合、つまり非常勤講師となる場合には大学当局の許可が必要なことも日米共通である。つまり講義は大学の権利下にある。

■では、バーチャル大学における教科書の著作権は教員にあるのか。そもそもオンライン授業のコンテンツは、講義なのか教科書なのか。これについて本誌四八号に「講義と教科書と教材が、オンライン上ではすべてが融合した形態になり、そのどれとも特定できなくなっている」（吉田文）という指摘がある。とすれば、オンライン授業の著作権問題はウェブがもたらした新たな問題といえる。

■これに関して、今春、教科書出版社にとって驚くような発表があった。マサチューセッツ工科大学は今後十年間で、ほぼすべての講義内容をインターネットで無料公開するという。MIT OpenCourseWare(OCW)と名付けられたこのプロジェクトは今年秋にスタートし、最初の二年半でウェブを利用するためのソフトウェア開発と五百以上の講義内容を準備する。最終的には多岐にわたる分野で二千コースの開設をめざすという。利用対象は当然、MITのみならず世界中の学生や教育機関である。ただちにアメリカ国内を始めワールドワイドで反響があった。

■単位認定も教員との交流もないOCWはバーチャル大学ではない。MITで学び卒業証書がほしい者は、今後とも大学の門をくぐることになる。自分たちの講義に対する自信とともに、すべてを公開することで、MITで学ぶ魅力は増すと確信しているのである。学位授与機関としての権威を保つことで、大学ビジネスは不変である。

■一方、紙の教科書出版社が打撃を受けることは間違いない。MITの教授の一人は香港で過ごした少年時代に、父親からもらったMITの教科書にインスパイアされた体験を持っている。本の力を知っている彼は、ウェブの時代にふさわしい方法で、自らの体験を生かそうとしているのである。

■MITの教員はOCWの著作権をどう考えているのだろうか。事実、教授会では熱狂的な賛同とともに、講義内容を有料で提供することから得られる富を手放すことはない、という反論もあったという。その富を手放すのは大学当局なのか教員個人なのか。さらにいえば出版社なのか。どのような議論があったのかはうかがい知れないが、コンピュータプログラムのオープンソース化に対し先進的な貢献をしてきたMITの結論は、フリーと出たのである。

■この決断は「一石を投じる」なんてレベルではない。まさに歴史的な大津波となって高等教育の壁を越え、出版社に押し寄せてくるだろう。（偽聴講生）

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会
060-0809 札幌市北区北９条西８丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

聖学院大学出版会
362-8585 上尾市戸崎 1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

麗澤大学出版会
277-8686 柏市光ヶ丘 2-1-1
TEL 0471-73-3331 FAX 0471-73-3154

慶應義塾大学出版会
108-8346 港区三田 2-19-30
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3454-7029

産能大学出版部
152-0035 目黒区自由が丘 2-16-5 自由が丘昭和ビル
TEL 03-3724-9101 FAX 03-5701-7499

専修大学出版局
101-0051 千代田区神田神保町 3-8-3 専修大学４号館
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

玉川大学出版部
194-8610 町田市玉川学園 6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部
192-0393 八王子市東中野 742-1
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

東海大学出版会
151-0063 渋谷区富ヶ谷 2-28-4 東海大学校舎内
TEL 03-5478-0891 FAX 03-5478-0870

東京大学出版会
113-8654 文京区本郷 7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局
101-8457 千代田区神田錦町 2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会
156-8502 世田谷区桜丘 1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

法政大学出版局
102-0073 千代田区九段北 3-2-7
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

放送大学教育振興会
105-0001 港区虎ノ門 1-14-1 郵政互助会琴平ビル３F
TEL 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482

明星大学出版部
191-8506 日野市程久保 2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部
169-0071 新宿区戸塚町 1-103
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

名古屋大学出版会
464-0814 名古屋市千種区不老町１名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

京都大学学術出版会
606-8305 京都市左京区吉田河原町 15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部
581-8511 八尾市楽音寺 6-10
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

大阪大学出版会
565-0871 吹田市山田丘 1-1 大阪大学事務局内
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部
564-8680 吹田市山手町 3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

九州大学出版会
812-0053 福岡市東区箱崎 7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172

東北大学出版会（準会員）
980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-225-2029

流通経済大学出版会（準会員）
301-8555 龍ヶ崎市平畑 120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

三重大学出版会（準会員）
514-8507 津市上浜町 1515 三重大学出版ホール内
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

関西学院大学出版会（準会員）
662-0891 西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL 0798-53-5233（内線 3475） FAX 0798-53-9592

大学出版 五〇号（二〇〇一年秋） 二〇〇一年九月一日発行 頒価一〇〇円（干共） 発行所＝大学出版部協会 ISSN 0913-3305
〒一一三―八六五四 東京都文京区本郷七―三―一 東大構内 東京大学出版会内 電話〇三（三八一二）二一一一（内線八七九五五） E-MAIL：mail@ajup-net.com URL：http://www.ajup-net.com/